

京都大学	博士（ 文学 ）	氏名	焦 堃
論文題目	陽明学と明の政治		
（論文内容の要旨） 〈序論〉 従来の陽明学研究においては、その思想が産生された社会的条件、現実社会に与えた影響については余り論じられることがなかった。しかし、王陽明と学派のメンバーの政治への関与を考えれば、改めて彼らの思想が当時の政治空間の中で如何に展開してきたか、彼らの存在が明の政治にいかなる影響を与えたかが問題になる。 本論は明代の政治構造の特徴である「内閣—翰林院体制」に対する陽明学派の政治姿勢を分析の基軸にすえて、陽明学と政治の関係について考察するものである。 〈第一章 陽明学成立前史—若き王陽明の政治活動を中心に〉 王陽明は入仕後文学サークルに参加し、その主宰であった内閣大学士李東陽の傘下にいた時点ではエリート集団に属していたが、その一員李夢陽が宦官劉瑾を弾劾した事件により、グループの大半とともに失脚した。その後起きた龍場頓悟は彼の哲学的な反省だけでなく、政治生活の転換点となり、それまでの「気節」に任せた政治行動を否定するようになった。 しかし、余英時が論じるように、これ以後陽明が「遯」を問題にしたのは彼が現実政治へのコミットメントを回避したことを意味しない。陽明は「正道を隠かに扶ける」ことを強調している。それは、のちに彼が中央政府に入った弟子たちに政治行動の指針を示すことで間接的に政局にかかわった態度にあい通じる。 〈第二章 陽明学派の形成—社会史、政治史の視点による考察〉 王陽明が多くの生員層を門下に吸引しえたのは、その政治的影響力と教育事業によるところが大きかった。紹興において知府南大吉の支援のもとに書院を作った例に見られるように、彼は教育に意を注いだが、それは自らの学問を伝えるためだけではなく、彼は科挙受験のための学問を随所で批判する一方で、科挙を通じてしか聖賢の道を実現する方途はないとして、挙業を奨励していた節がある。じじつ、陽明門下からは科挙合格者が輩出しているし、陽明は科挙を自派の喧伝にも利用しているのである。嘉靖七年（1528）の陽明の死後も、書院の建設、講会の開催により、学派のネットワークは江西、浙江北部、南京近辺を中心として広がっていった。 〈第三章 陽明学派と嘉靖初年の政治〉 嘉靖初年の「大礼の議」で皇帝を支持した陽明学派は政治の表舞台に躍り出た。皇帝の生父の扱いをめぐる「大礼の議」の背景には内閣の権力拡張への反発があり、皇帝支持派の張璁らは内閣の利権政治の弊害を暴き立てたが、彼らは概ね「内閣—翰林院」体制から締め出されていた人々だった。そして、世宗支持派として出世した八人中四人は陽明の弟子であり、筆頭の張璁にも陽明との交流があった。 陽明の「人情に沿って礼を定めるべし」という主張は、大礼の議における世宗支持派のバックボーンとなっていた。また、陽明は嘉靖初年の政局を壟断した楊廷和とは以前から対立関係にあったが、個人的問題にとどまらず、時の内閣—翰林院体制に批判的態度をとっていた。そうした彼の政治に対する態度を示すのが「断断不休」すなわち「派閥や門戸の見を排して人材を積極的に登用すべし」という主張であった。しかし、かかる主張は張璁らの受け入れるところとならず、首輔（内閣首班）となった張璁と陽明の弟子たちは対立するに至ったのである。 〈第四章 王陽明亡き後の陽明学派〉 張璁一派と対立した陽明学派は、師の死後に受難の時を迎える。陽明の晩年に生員の身分で入門した世代の中から科挙に合格し、中央政界で頭角を現す者が出てきてい			

たが、彼らの台頭は抑え込まれてしまったのである。張璁の失脚後に実権を握った夏言が首輔となった後も、戚賢、王畿、錢徳洪らが左遷、免官された。こうして、嘉靖二十年代は陽明学派不遇の時代となった。

しかし、学派の一人徐階の復権が転機となった。彼の中央復帰を後押しした夏言が陽明学派の数人を追い落としてゆく中で、徐階のみが学派の命脈を中央で保ち続けていた。ついで嚴嵩が実権を握ると、徐階だけでなく、学派の数人が嚴嵩との人脈で浮上する。嘉靖三十二年（1553）に徐階が北京で大規模な講会を開催したのも、学派のデモンストレーションであると同時に、彼らの政治的地位が上昇したものとみることができる。しかし、有力メンバーの上昇は同時にかつて学派が批判していた「内閣-翰林院」体制への接近を意味していたのである。

徐階は陽明学派のネットワークや講会を自らの勢力拡張にも利用したし、彼のそうした政治行動が学派をさらに伸長させることになり、彼が首輔となると学派は全盛期を迎えた。しかし、徐階が内閣専権を回避する施策を取って陽明の政治主張を実現する一方で、彼の影響下に翰林院に入った者が以後の内閣をほぼ独占的に構成してゆくことになり、陽明学派の反内閣的性格は薄れてゆく。

それにかわって万暦年間以後、反内閣運動の担い手は東林党に移っていった。陽明学派にはこれに合流する者（鄒元標ら）もあれば、権力者に接近する者（耿定向、李贄ら）もいたが、いずれにせよ陽明学派は政治的には独自の意義を失っていったのである。

〈結語〉

本論をまとめた上で、さらに陽明学派と東林党の君主観の違い、学派の地域性が思想のみならず、政治行動の違いにも表れたことを指摘する。

（論文審査の結果の要旨）

近年、明代に生まれた思想運動である陽明学を、当時の政治文化の中に位置づけようとする試みが活発になってきている。海外では余英時『宋明理学与政治文化』（2004）、日本では中純夫の「徐階研究」（1991）以下の一連の研究がその代表的成果である。

余英時は王陽明の有名な龍場頓悟を彼の思想的転換ととらえるだけでなく、その政治に対する姿勢の変化を意味するとした。すなわち、陽明はこれ以後天下に道が行われるためには、君主に期待する（朱子学的な「得君行道」）のではなく、人民の覚醒を促さねばならない（「覚民行道」）として、働きかける対象を変えたと言うのである。また、この変化は陽明一個の問題にとどまらず、近世士大夫の君主—政治観の一つの転換点を示すものと主張している。国際的な思想史家が発したものであるだけにその影響するところは大きい。本論文の著者もまたここから研究の着想を得ている。

しかし、余の議論は点描にとどまっており、頓悟以後の陽明の活動及び後継世代の政治姿勢を分析したものではない。本論文は、頓悟が陽明の政治姿勢の転機となったことを認めつつも、以後も陽明が弟子を通じて中央政治に影響を及ぼしたこと、そしてその死後も学派が様々な形で中央政治に積極的に関与したことを明らかにしようとしたものである。その特色は以下の三点にまとめられる。

一、陽明学の登場から万暦年間までの陽明学派の中央政局への関与について、「内閣—翰林院体制」との関係性という分析軸に沿って一貫した記述を行い、それが同時に明代中後期の政治史の流れを裏側からあぶりだすものになっている。

陽明学と政治のかかわりという観点については、嘉靖初年の「大礼の議」における皇帝支持派の議論を陽明の主張が支えていたことがすでに指摘されているし、嘉靖後半に首輔となった陽明学者徐階については、上掲の中純夫による先駆的研究が存在する。また、田澍『嘉靖革新研究』（2002）、城地孝『長城と北京の朝政』（2012）など嘉靖年間の政治史に注目した研究が近年出ているが、いずれも嘉靖の四十五年間を通貫して扱うものではない。本論文と同じく中長期を扱う鄧志峰『王学与晚明的師道復興運動』（2004）は学派の重要人物の政治行動について個々に明らかにしているが、分析の明確な軸が立てられていない。

これに対して、本論文は明代中期以降の中央政治の基軸となった「内閣—翰林院体制」という一握りのトップ・エリートによる政治寡占状況に陽明学派がいかに相対したかを叙述の軸に据える。この体制を当初は打破しようと試みた張璁政権に対する王陽明と弟子たちの働きかけとその挫折、徐階の上昇に伴う学派の復権、「内閣—翰林院体制」に対する新たな批判勢力として台頭してくる東林党と陽明学派の関係を跡付けた結果、陽明学派の政治に対する姿勢の変化が明らかになった。と同時に、結果として張璁→夏言→嚴嵩→徐階→高拱→張居正という首輔の交代によって描き出されてきた伝統的な政治史を別の角度から照射するものとなっている。

二、講会の盛行と中央政治の関係を浮かび上がらせた。

陽明学派の伸長に大きく作用した講会の消長については、呉震『明代知識講学活動繫年』（2003）などによって整理が進んでいる。しかし、徐階が主宰した北京の講会に焦点を当て、その政治的意味を具体的に明らかにしたのは本論がはじめてと言ってよい。北京は科挙の会試、官僚の朝覲の場であり、全国から多くの挙人や官僚が集まり、また散ってゆく。その北京で講会を開くことは学派の一大デモンストレーションであり、おのずと政治的な色彩を帯びたものになる。また、陽明学の一派である泰州学派の一人羅汝芳が講会へ人員を結集し（嘉靖三十二年）、徐階に人材選別の場として利用するように勧めた（嘉靖四十四年）ことを指摘し、講会の背後に政治的思惑が潜んでいたことを浮き彫りにし、同時に徐階の政権奪取に際して羅

と同門の何心隱、二人の師である顔山農が果たした役割を述べて、陽明学派の中央政治における暗躍を活写している。

三、泰州学派による中央政治への関与の姿を明らかにした。

陽明学派の中でも急進的な泰州学派に属する顔山農、何心隱、李贄はその思想のユニークさゆえに注目を浴び、研究も多い。しかし、彼らの矯激な生の形はなかなかとらえどころがない。本論文は彼らの思想には踏み込まないが、その中央政局へのコミットメントを叙述することで、羅汝芳・耿定向を含めて泰州学派には権力に接近する傾向が強いことを示し、一方では鄒元標ら「江右王門」（江西の陽明学派）が東林派と親和的であったことを示して、学派の中の分派によって政治行動が異なることを指摘した。このことはおそらく分派の思想の差異と結びついているであろうから、今後思想史研究にも生かされる可能性がある。

以上三点に加えて、叙述の妙も指摘しておきたい。これだけ多くの人物を登場させながら、陽明学者銘々伝におちいることなく、一筆書きのようになめらかに叙述が展開して、論文全体が一個の作品たりえている。

ただ、改善の余地も残している。泰州学派と対比される江右王門のうち前期に属する欧陽徳らの中央政局における位置や講学活動と政治の関係が十分に述べられていないし、徐階政権以後の隆慶年間・万暦初年の学派の動向が欠落するなど、書き込みがまだ足りない。関連史料についての書誌学的考察にも詰め残している。また、余英時の議論は単に王陽明の政局に対する姿勢にかかわるものではなく、君主—政治観を問題にしているが、本論文は内閣を対象にしたために、君主観については最後に軽く触れるにとどまり、余が投げかけた問題に対して片面的にしかならな答えていない。これらについては今後の展開に期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2014年2月20日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。